

	仏教を世界に！—国際仏教研究の最近の取り組みをめぐって—	1
	2015(平成27)年度「特定・指定研究」等研究組織一覧	2
目	2015(平成27)年度「特定・指定研究」等研究目的紹介	4
	2015(平成27)年度「一般研究」研究組織一覧	9
次	2015(平成27)年度「一般研究」(新規採択課題)研究目的紹介	12
	海外学会報告	19
	海外研究調査報告	20
	学術交流協定に基づく共同研究	21
	2014年度「特定・指定研究」等研究成果報告会	23
	叢報	24

# 研究所報

## 仏教を世界に！—国際仏教研究の最近の取り組みをめぐって—

国際仏教研究 教授 Robert F. Rhodes

現在、真宗総合研究所にはいくつかの指定研究が設けられ、それぞれ大学に必要とされている研究を継続的に行っているが、私はそのなかの「国際仏教研究」(以下「国際研」)に長年関わってきた。この指定研究は、海外における仏教研究の動向を把握するとともに、本学の仏教研究を世界に発信することを使命としている。この研究班は真宗総合研究所が開設された当初から立てられていて、組織や名称を変え、調査研究の地域を拡大しつつ、今日に至っている。最初は欧米で出版された仏教関係の学術書や学術論文の収集と分析に努めていたが、後には欧米のみならずアジア諸国の大学や研究所との共同研究や国際学会の開催とその成果の出版などにも力を注ぎ、数年前には明治以降の真宗近代教学を英語で紹介するアンソロジーも出版している。このように、国際仏教研究は様々な活動を行っているが、以下、私が最近関わってきた取組を2件ほど紹介したいと思う。

そのなかで最初に挙げておきたいのがハンガリーの首都ブダペストにあるエトヴェシュ・ロラード大学(Eötvös Loránd University、ELTEと略称する)との学術交流である。この大学は1635年に設立されたハンガリーの最高学府である。9世紀に東方から侵入してきたマジャール人たちによって建国されたこともあり、ハンガリーでは東洋に対する関心は強く、ELTEでもチベットやモンゴル、または中国を中心とした東洋学の長い伝統を持ち、仏教についても盛んに研究が行われている。本学とELTEの関係は、現在ELTE東アジア研究所の所長であるハマル・イムレ教授が客員研究員として本学に滞在したことをきっかけにして始まり、2007年には学術協定が交わされ、それに基づいて様々な交流が行われている。そのなかでも、ELTEで日本仏教についての英語での集中講義が、本学の教員によって継続的に行われていることは特筆すべきことであろう。2010年から始まったこの集中講義は、毎年20から30人の学生が受

講している。私も3回ほど授業を行ってきたが、講義の最終日に行う試験を日本語で書く学生もいて、ELTEの学生のレベルの高さに驚かされる。そのような学生のなかから、ハンガリーの日本仏教研究を荷なう研究者が生まれてくることを期待している。

また集中講義とは別に、ELTEと共同で国際シンポジウムも定期的に行われている。一昨年秋に行われた最初のシンポジウムは、「仏教における信」をテーマとしてELTEで開催されたが、本学からは私も含めて5人が参加し研究発表を行った。その成果は近いうちに出版される予定である。また来年には本学で第2回目のシンポジウムが開催されることとなっているが、そこでは「ブッダの言葉の解釈」(仮題)をテーマに、活発な議論が繰り広げられることであろう。

次に、国際研では、長年の間、真宗の近代教学を欧米で紹介するために、学外の研究者の協力を得て、清沢満之・曾我量深・金子大栄・安田理深という4人の教学者の代表的著作を英訳してきたが、2013年にそれらをまとめた*Cultivating Spirituality: A Modern Shin Buddhist Anthology*(編集者はカリフォルニア大学バークレー校のマーク・ブラム教授と私)を出版することができ、一応の成果を得ることができた。この本には4人の教学者についての解説に加えて、ブラム教授による明治仏教についての詳しいイントロダクションが収められているが、近代の日本仏教の流れと真宗の近代教学との関わりを十分に解き明かすまでには至っていない。そこで、この点を補足するために今年の6月26日(金)から27日(土)にかけて、「*Cultivating Spirituality*出版記念シンポジウム」を開催した。このシンポジウムでは国の内外から16名の研究者を招いて、近代日本における真宗教団の動向や清沢満之を初めとする近代教学者の思索と思想を究明を目指すものだが、その成果は英語の論文集にまとめられ、世界に発信する計画である。

# 2015(平成27)年度「特定・指定研究」等研究組織一覽

【特定研究】

(2015.4.1付)

研究名	研究課題及び研究組織
教如上人研究	<p>研究課題 真宗大谷派・東本願寺開祖である教如上人に関わる史料の調査と研究</p> <p>研究代表者 草野 顕之 (学長・教授・日本仏教史学)</p> <p>研究員 平野 寿則 (チーフ・准教授・日本近世史・近世仏教史・真宗史)</p> <p>東 舘 紹 見 (教授・日本仏教史)</p> <p>川 端 泰 幸 (講師・日本中世史)</p> <p>嘱託研究員 福 島 栄 寿 (准教授・日本仏教史・近代日本思想史)</p> <p>大 桑 齊 (本学名誉教授)</p> <p>山 田 哲 也 (裏千家学園講師・本学非常勤講師)</p>

【指定研究】

研究名	研究課題及び研究組織
清沢満之研究	<p>研究課題 清沢満之の生涯と思想の研究を更に進め、その成果を『清沢満之全集』の補遺として、発刊する。</p> <p>研究代表者 藤原 正 寿</p> <p>研究員 藤原 正 寿 (短期大学部准教授・真宗学)</p> <p>加 来 雄 之 (教授・真宗学)</p> <p>一 楽 真 (教授・真宗学)</p> <p>西 本 祐 攝 (短期大学部講師・真宗学)</p> <p>嘱託研究員 安 富 信 哉 (本学名誉教授)</p> <p>村 山 保 史 (教授・西洋哲学・日本哲学)</p> <p>名 畑 直 日 兎 (真宗大谷派教学研究所研究員)</p> <p>研究補助員 (RA) 村 上 良 顕 (博士後期課程第3学年)</p> <p>(RA) 石 原 樹 (博士後期課程第2学年)</p>
国際仏教研究	<p>研究課題 諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開</p> <p>研究代表者 井 上 尚 実</p> <p>研究員 井 上 尚 実 (准教授・真宗学)</p> <p>Robert F. Rhodes (教授・仏教学)</p> <p>Michael J. Conway (講師・真宗学)</p> <p>藤 枝 真 (准教授・宗教学・哲学)</p> <p>井 黒 忍 (講師・東洋史学)</p> <p>嘱託研究員 Michael Pye (マールブルク大学名誉教授)</p> <p>James C. Dobbins (オーバーリン大学教授)</p> <p>Mark L. Blum (カリフォルニア大学バークレー校教授)</p> <p>Paul Watt (早稲田大学留学センター教授)</p> <p>羽 田 信 生 (毎田周一センター所長・本学非常勤講師)</p> <p>阿 満 道 尋 (アラスカ州立大学アンカレッジ校准教授)</p> <p>研究補助員 (RA) 梶 哲 也 (博士後期課程第2学年)</p> <p>(RA) 味 村 考 祐 (博士後期課程第3学年)</p> <p>(RA) 尾 崎 俊 文 (博士後期課程第3学年)</p>

研究名	研究課題及び研究組織	
ベトナム仏教研究	研究課題	ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との共同研究
	研究代表者	織田 顕 祐
	研究員	織田 顕 祐 (教授・仏教学) 浅見 直一郎 (教授・東洋史学) 箕浦 暁 雄 (准教授・仏教学)
	嘱託研究員	桃木 至 朗 (大阪大学教授) 大西 和 彦 (ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院客員研究員) 福 島 重 (本学非常勤講師)
西藏文献研究	研究課題	チベット語文献及びパーリ語貝葉写本のデータベース化
	研究代表者	三宅 伸一郎
	研究員	三宅 伸一郎 (准教授・チベット学) 武田 和 哉 (准教授・人文情報学科・歴史学・考古学) 藤田 義 孝 (准教授・フランス文学)
	嘱託研究員	白 館 戒 雲 (本学名誉教授・特別研究員) U. Erdenebat (モンゴル国立大学社会科学部教授) 清 水 洋 平 (本学非常勤講師・特別研究員) 高 本 康 子 (北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター学術研究員) 西 沢 史 仁 (特別研究員)
	研究補助員 (RA)	LAMAO ZHUOMA (博士後期課程第3学年)
	(RA)	ARILDII BURMAA (博士後期課程第1学年)

## 【資料室】

名 称	研究課題及び研究組織	
大谷大学史資料室	研究課題	大学史関係資料の収集・整理
	室 長	松 浦 典 弘 (研究所主事・准教授・東洋史学)
	嘱託研究員	戸 次 顕 彰 (本学非常勤講師)
	研究補助員 (RA)	松 岡 智 美 (博士後期課程第3学年)
東本願寺海外布教資料室	研究課題	大谷大学図書館所蔵「東本願寺旧蔵資料」海外布教関係部分の整理
	室 長	桂 華 淳 祥 (教授・東洋史学)
	嘱託研究員	松 川 節 (研究所長・教授・モンゴル学) 松 浦 典 弘 (研究所主事・准教授・東洋史学) 李 曼 寧 (本学博士後期課程修了)
	研究補助員 (RA)	濱 野 亮 介 (博士後期課程第3学年)
デジタル・アーカイブ資料室	研究課題	大谷大学所蔵貴重資料のデジタル・アーカイブの構築
	室 長	松 浦 典 弘 (研究所主事・准教授・東洋史学)

# 2015(平成27)年度「特定・指定研究」等研究目的紹介

## 教如上人研究

### 真宗大谷派・東本願寺開祖である 教如上人に関する史料の調査と研究

チーフ・准教授 平野 寿則  
(日本近世史・近世仏教史・真宗史)

#### 研究目的

真宗大谷派・東本願寺開祖の位置にある教如上人の研究は、「大谷派なる精神」、大谷派存立の理念と存在理由を明らかにする意義を有している。本研究はそのような目的のもと、教如上人に関する史料の全面的・組織的な調査を実施し、それらを体系的に整理して、将来的には出版・公刊し、広く内外に成果を問うことを目的とするものである。

研究の前提として、2013(平成25)年に教如上人の四百回忌法要が真宗本願および各地で執行されて以降、教如上人に対する関心が高まっている点が第一に挙げられる。また、そのなかで、教如上人に関する新史料の発見もあい次いでおり、調査研究の好機であると考えられる。この機会を捉え、教如上人に関わる史料の収集・調査・研究を行うことを本研究の目的とする。

#### 研究計画

本研究では、伝記史料・教学的史料・東本願寺別立・教団形成過程を解明する史料など、教如上人に関わる全ての史料を調査対象として調査研究を進める。特に調査・研究の中心にするものとしては、教如の消息類、名号・本尊・法名状など教如が裏書をして授与した法宝物、教如開板の聖教類などの一次史料が挙げられる。これに加えて、大谷大学図書館・博物館などに所蔵される教如上人関係伝記なども対象とする。具体的には以下のとおりである。

##### 1. データの収集・データベース作成

2015年度は前年度より進めてきた刊本史料からの教如上人史料データ収集・データベース作成に引き続き取り組む。

##### 2. 調査による教如上人史料の収集

2014年度に着手しはじめた寺院調査などの現地調査をさらに進めていく。教如上人関係史料は未調査のもの

や、公開・紹介されていないものが多いため、かかる調査から新たな知見を得ることができると考える。寺院調査の結果については、逐次報告書をまとめて刊行しており、2015年度以降に実施する寺院調査においても、その結果や明らかになった事柄を順次報告書としてまとめ、情報の整理と検討を行い、研究成果の公開・公刊に向けた準備に取り組んでいくこととする。

## 清沢満之研究

### 本学・学祖清沢満之に関する 研究調査と史料の収集および 公開

研究代表者・准教授 藤原 正寿  
(真宗学)

本研究は、本学・学祖である清沢満之の生涯と思想に関する研究調査を行い、その成果をすでに刊行されている『清沢満之全集』(岩波書店)を補完する史料として公にすることを目的とするものである。2002年の清沢満之100回忌にあわせて刊行されたこの『全集』は、清沢満之個人についての研究のみならず日本の近代の思想研究なканずく、仏教研究に資する成果であった。

清沢満之の全集については、本研究所での研究成果であるこの全集以前にも幾度か編纂されており、とくに西村見暁らによって編纂された『清沢満之全集』(法蔵館、1953~1956)は先行する全集として優れた業績であった。特に第一・三・五・八巻に収められている清沢満之に関する追憶・資料編は、本研究所の全集には収録されておらず、現在でも清沢満之の研究者にとっては貴重な資料となっている。しかしこの全集は現在絶版状況にあり、入手が困難になっている。そこで本研究では、この法蔵館発刊の『全集』第一・三・五・八巻を基礎資料として、さら清沢満之に関わるさまざまな周辺資料を再調査し、整理収集を行っていく。また、『全集』(岩波書店)発刊以降に確認された清沢満之自身に関する資料(すでに数点の資料が確認されている)を調査収集し、公にしていくことも目的としている。

今年度は、昨年度に引き続き、『清沢満之全集』刊行時の研究資料、記録等を精査し、どのような課題が残

されているのかを再検討する。そして、今回更に調査すべき内容を抽出し、資料を渉猟することを行う予定である。具体的には、『全集』刊行以後存在が確認された資料を収集分析し、掲載の有無を確定する。

研究作業に当たっては、補遺刊行に向けて、清沢満之の終焉の寺である西方寺との協議や更なる史料調査先の再検討および調査、存在が確認された史料の収集・整理、翻刻作業などを行っていく予定である。

これまで真宗総合研究所においてなされてきた清沢満之に関するさまざまな研究の成果を継承しながら、未だ全集等に掲載されていない貴重な史料の渉猟整理およびデジタル化した史料のデータベース構築と、史料の翻刻を中心に、昨年度に引き続いて作業を進め、清沢満之に関する研究の基礎資料を提示していくことが出来るようにしていきたいと考えている。

## 国際仏教研究

### 諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の整理・収集・公開

研究代表者 准教授 井上 尚実  
(真宗学)

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。

近年、仏教学・宗教学の分野における国際化は以前にも増して急速に進んでおり、真宗を中心とした仏教・浄土教研究についても外国語による研究を視野に入れなければならない状況になっている。今年度は英米班、ドイツ・フランス班、東アジア班の三班の体制で研究を進め、それぞれ下記のような研究テーマで活動する。  
(研究テーマ)

- ①英米班：真宗を中心とした仏教研究動向を把握し、真宗関連資料の翻訳出版、欧米の研究者・研究機関との共同研究を立案・推進する。
- ②ドイツ・フランス班：プロテスタント神学との対話研究、および翻訳出版を行う(ドイツ)。  
近代化と宗教に関する研究、および翻訳出版を行う(フランス)。
- ③東アジア班：中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化の研究を行う。

#### (活動内容)

英米班

- ①真宗・仏教関係の国際学会大会参加
  - ・第17回 国際真宗学会 (IASBS) 大会 (2015年8月7日～9日、アメリカ合衆国カリフォルニア州パークレイ市仏教大学院) において“The Clarification of the Issue of Religious Subjectivity in Modern Ōtani-ha Doctrinal Studies” (近代大谷派教学における宗教的主体性の問題の解明) というテーマでパネル発表を行う (井上尚実研究員、マイケル・コンウェイ研究員、加来雄之教授、西本祐攝講師)。
  - ・第21回国際宗教学宗教史会議 (IAHR) 世界大会 (2015年8月23日～29日、ドイツ連邦共和国エアフルト大学) において“Attempts at Adaptation in Contemporary Japanese Buddhism: Organizational and Discursive Transformation in the Pure Land Tradition” (現代日本仏教における適応の試み：浄土教の伝統における組織的・言説的変革) というテーマでパネル発表を行う (ロバート・F・ローズ研究員、藤枝真研究員、マイケル・コンウェイ研究員、木越康教授、新田智通講師)。
- ②真宗近代教学アンソロジー *Cultivating Spirituality* 出版記念シンポジウムの開催  
2015年6月26日(金)27日(土)の2日間、大谷大学で *Cultivating Spirituality* 出版 (SUNY, 2011) を記念したシンポジウムを開催する。
- ③エトヴェシ・ロラード大学 (ELTE) と共催の第2回国際仏教シンポジウムの計画  
ハンガリーのELTE東アジア研究所と共催の第2回シンポジウムを2016年5月に大谷大学で開催する計画を具体化し、必要な準備を進める。
- ④真宗関係の翻訳研究  
阿満道尋囑託研究員を中心に進めてきた英語版の教師課程教科書『浄土の真宗』を、真宗大谷派北米開教区真宗センターから出版する。さらに『教団の歩み』英訳の問題点確認と編集作業に協力する。また、英米班として次に取り組むべき中長期的翻訳研究の真宗関係テキストの選定を行う。
- ⑤公開講演会の開催  
国内外で活躍している仏教学・真宗学関係の研究者を招聘し、公開講演会を3回程度開催する。第1回は4月に行われ、第2回は9月にELTEのハマル・イムレ教授による講演を予定している。
- ⑥真宗・仏教関係の欧文書籍・研究論文の書誌データ収集と整理  
電子ジャーナル掲載論文を含めた欧文の仏教学・

真宗学関係の近刊データを集めて整理し、公開できるように準備する。国際仏教研究が所蔵する欧文図書雑誌等について、移管できるものは図書館で検索閲覧できるようにする方向で図書館と協議を進める。

#### ドイツ・フランス班

- ①プロテスタント神学との対話研究、および翻訳出版  
浄土真宗とプロテスタント神学との対話・比較研究を継続し、その成果を出版することが本研究の目的である。

具体的な研究として、マールブルク大学神学部教授 Dietrich Korsch氏のMartin Luther: Eine Einführung, Zweite Auflageの翻訳出版を計画している。本書は数多あるルター研究書の中でも、ルターの文化史的影響を中心に考察した稀な本であり、日本語で出版する意義は大きい。

- ②近代化と宗教に関する研究および翻訳出版

特にドイツ・フランスの宗教学研究の伝統にもとづいて、「近代化と宗教」というテーマについての研究を継続していく。

フランス国立高等研究院 (EPHE) の宗教社会学部門と開催したシンポジウム「フランスと日本におけるナショナル・アイデンティティと宗教」で発表した原稿を論文化し、刊行の準備が進んでいる。フランスの出版社Brepolsから出版される予定である。

このテーマに関連して、2015年8月にドイツ・エアフルト大学で開催される、第21回国際宗教学宗教史学会 (IAHR) でパネル発表をする (英米班と協同)。

#### 東アジア班

中国社会科学院歴史研究所において学術交流協定を締結し、2015年度よりさらに5年間交流を続けることとなった。本年度も本学から2名を派遣、先方から2名を招聘し、それぞれ公開研究会を開催する予定である。また、本学にて国際シンポジウムを開催する予定である。具体的な研究活動としては下記を予定する。

- ①2015年5月に国内外より研究者を招き、大谷大学博物館所蔵『華夷譯語』出版記念国際シンポジウムを開催する。  
②2015年7月に中国社会科学院歴史研究所より研究者を招聘し、共同研究ならびに公開研究会を開催する。  
③中国社会科学院歴史研究所と共催する国際シンポジウムを予定する。

## ベトナム仏教研究

### ベトナム社会科学アカデミー 宗教研究院との共同研究

研究代表者・教授 織田 顕祐  
(仏教学)

ベトナム社会主義共和国のベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との間で締結された「学術交流に関する協定」に基づき共同研究を推進する。調査・研究協力のみならず研究者育成などベトナム側からの要請に応じて、仏教研究に関する相互学術交流を行う。

ベトナムとの学術交流は、大きく二つの意義を持つ。第一に、これまで十分検討されてこなかったベトナム仏教の調査を実施し、ベトナム仏教の一端を明らかにする。第二に、その活動を通して得られたベトナム仏教の独自性に照らして、我々もまた日本仏教史や東アジアの仏教の展開を外側から再検証する視点を獲得。

上記の研究目的を達成するために、宗教研究院と相談しながら、具体的には以下を実行する。

1. 日本仏教概説の編纂 (その内容点検、ベトナム語訳作業の開始。そのための研究協議・相互交流。)
2. 北部ベトナム寺院調査・所蔵文献・版木調査
3. ベトナムにおける「日本語研究教育を含む日本研究・東アジア研究・仏教研究 (人文科学・社会科学分野)」の実態の把握 (日本仏教概説翻訳作業の下準備の意味も含む。)
4. ベトナムの仏教 (宗教)・歴史・文化に関する文献資料 (海外の先行研究を含む) の収集

これらのうち、日本仏教概説の編纂は、日本の仏教思想史を独自の見識をもって提示することを意図している。日本仏教の展開を、アジア地域における異文化交流 (仏教の受容・展開・完成・普及の四つの視点を日本社会の展開と重ねながら) のなかで捉え、その時々々の仏教思想の特徴を明確にしたい。これによって、日本仏教の啓蒙書をベトナム語ではじめて提供することになる。

また、バクザン省ボーダー寺 (普陀寺) やハイズオン省アンニン寺 (安寧寺) などの北部ベトナム地域の寺院調査・所蔵文献・版木調査によって、ベトナムに

おける仏教受容の一側面が明らかになれば、アジアにおける仏教受容・伝播を軸とした相互交流の実態を解明する手掛かりを得ることにつながり、東アジア・東南アジアの地域文化史に新たな視点を提供することが可能になろう。

## 西藏文献研究

### チベット語文献及びパーリ語 貝葉写本のデータベース化

研究代表者・准教授 三宅 伸一郎  
(チベット学)

本学所蔵のチベット語文献およびパーリ語貝葉写本を、データベース化し、重要・貴重と思われるものについては電子テキスト化・デジタル画像化等の形で公開することを主な目的とする。この目的を達成するために、2015年度は以下の研究をすすめる。

#### 1. チベット語文献の電子テキスト化

『サンブ寺統史「明鏡」』の校訂テキスト・和訳および詳細な研究を、テキストの影印と合わせて9月までに出版する。稀観書『中観学説決集』について、読みやすい形にした電子テキストを作成、逐次公開する。

#### 2. モンゴル国立大学との共同研究

最終年度である今年は、モンゴル国立大学のエルデンバト教授を招聘し、モンゴル国における考古学研究所の最新の研究成果を報告してもらう。9月以降のいずれかの時期にウランバートルにて研究成果報告会を開催する。

#### 3. 寺本婉雅資料の研究

資料の借用期限の切れる今年度中に、資料全体の棒目録の作成をおこなうとともに、『第二回西藏探検日誌：在北京之部』の翻刻をおこなう。

#### 4. パーリ語貝葉写本のデジタル化

タイ王室寺院所蔵写本のリスト整理をおこない、これとの比較を通し、本学所蔵写本のうちどれが稀観本に相当するかの抽出作業をおこなう。また、タイおよび大英図書館ないしはフランス極東学院で調査をおこ

なう。

#### 5. フランス国内所蔵のチベット語文献およびフランス学者による研究成果物等の調査

フランスに所蔵されているチベット語（敦煌文献以外の史資料類）およびパーリ語文献に関する情報収集調査を、おもに目録等にもとづきおこなう。同時に、チベット学およびパーリ学に関する最新の情報を収集する。

#### 6. 海外の研究者・研究機関との交流

随時、海外のチベット学・パーリ学研究者らによる公開研究会を開催する。

## 大学史資料室

### 大学史関係資料の収集・整理

室長・准教授 松浦 典弘  
(東洋史学)

本資料室の任務は、大谷大学の歴史にかかわる様々な資料を収集・整理し、適切な保管の方策を講じた上で、それらを広く公開し活用できるようにすることである。未だ十分に整理できていない所蔵資料の分類整理を継続的に進めながら、図書館1階エントランスホールに借り受けている展示ケースを活用し、年2～3回のスポット展示によって所蔵資料の公開・展示を行う。

また、今年度も引き続き全国大学史資料協議会の研究会（西日本部会）に参加し、他校のアイデアやノウハウを持ち帰って、本学における大学史関係資料の保存・公開方法の改善に役立てる予定である。

## 東本願寺海外布教資料室

# 大谷大学図書館所蔵 「東本願寺旧蔵資料」 海外布教関係部分の整理

室長・教授 桂華 淳祥  
(東洋史学)

大谷大学図書館所蔵の未整理資料「東本願寺旧蔵資料」に含まれる海外布教関係部分は、おもに20世紀前半における東本願寺の海外布教に関する公文書の綴りで、当時の海外布教の実態を伝える貴重な資料である。この未整理の資料を整理して「資料一覧」を作成するとともに、資料自体を適正な形態にまとめて保存することを目的とする本資料室では次のように活動を進めてきている。

資料はおおよそ1綴りを1纏まりとし段ボール箱に入れて仮整理をしている。その総数は166箱。このうち18箱分(満洲(中国東北部)関係で、その「資料一覧」は2008年3月発行『真宗総合研究所研究紀要』25に掲載)は、新形式の一覧に改めた上で、旧形式では記録していなかった法量などの測定を進めている。その他については順次新形式に従って整理作業を進めており、現在までに合わせて約80箱の調査・整理を完了している。

それとともに本資料整理の補助作業として、資料の記事内容と対比し確認・補足をするための海外布教関係年表も作成している。これは『宗門開教年表』(真宗大谷派宗務所組織部 1969)所載の記事を基礎データとして入力し、さらに東本願寺の機関誌(『真宗』『宗報』など)の関係記事も抽出して記録したものである。これについては明治・大正期を終了し、昭和期に至っている。

このような進行状況を踏まえ、今年度は、資料整理については更に10箱程度の完了を、年表の作成は一応の完成を目標としている。

具体的な作業方法は下記の通りであるが、史料の性質上、真宗総合研究所(研究所と略記)と図書館・博物館事務室(同事務室)との2カ所において行っている。

1. 事務書類綴りの状態になっている資料についてその内容を確認し、必要事項を記録する(事務室)。
2. 記録された必要事項を精査しつつ「資料一覧」を

作成する。また精査に必要な情報を得るため、海外布教に関する年表を作成する。(研究所)。

3. 作成された「資料一覧」の原案と対比し、内容を確認した資料を適正な形態にまとめて保存可能な状態にする(事務室)。

ちなみに新形式の資料一覧とは、後世、他の機関との情報共有の必要性が出てきた場合、それをより円滑にすることが出来るように従来の資料一覧の体裁を変更したものである。

## デジタル・アーカイブ資料室

# 大谷大学所蔵貴重資料の デジタル・アーカイブ構築

室長・准教授 松浦 典弘  
(東洋史学)

本学に所蔵された多くの貴重な文献資料を半永久的に保存し活用していくため、資料をデジタル・データ化し、分類整理・保存する作業を継続的に行う。その一環として、2010年度より本学図書館所蔵古典籍を書誌学データベースとして登録する作業を続けており、今年度も引き続きデジタル・アーカイブ化を進めていく。ただし、作業の完了までには、なお歳月を要すると見込まれる。



## 2015(平成27)年度「一般研究」研究組織一覧

【共同研究】

(2015.4.1付)

研究名等	研究課題及び研究組織
【2013～2016年度「科研費」採択】 一般研究（小谷班）	研究課題 スティラマティの俱舎論注釈書『真実義』梵文写本第一章の研究 研究代表者 小谷 信千代 研究員 小谷 信千代（本学名誉教授・特別研究員） 協同研究員 秋本 勝（京都女子大学教授） 福田 琢（同朋大学教授） 本庄 良文（佛教大学教授） 松田 和信（佛教大学教授） 箕浦 暁雄（准教授・仏教学） 上野 牧生（助教・仏教学） 加納 和雄（高野山大学准教授） 松下 俊英（本学非常勤講師・特別研究員）
【2013～2015年度「科研費」採択】 一般研究（武田班）①	研究課題 デジタルアーカイブ技術による契丹国の歴史考古言語資料の復元的研究と集成 研究代表者 武田 和哉 研究員 武田 和哉（准教授・歴史学・考古学・人文情報学） 協同研究員 松川 節（教授・モンゴル学） 町田 吉隆（神戸市立工業高等専門学校教授） 等々力 政彦（本研究所協同研究員） 高橋 学而（福岡文化学園博多女子高等学校教諭） 武内 康則（京都大学白眉センター助教） 藤原 崇人（関西大学東西学術研究所非常勤研究員） 橘 堂 晃一（龍谷大学研究員） 福井 敏（本学非常勤講師）
【2013～2015年度「科研費」採択】 一般研究（村山班）	研究課題 日本における西洋哲学の初期受容ーフェノロサの東大時代未公開講義録の翻刻・翻訳ー 研究代表者 村山 保史 研究員 村山 保史（教授・西洋哲学・日本哲学） 朴 一 功（教授・西洋古代哲学） 渡辺 啓真（教授・倫理学） 協同研究員 藤田 正勝（京都大学大学院教授） 竹花 洋佑（本学非常勤講師） 西尾 浩二（本学非常勤講師）
【2014～2016年度「科研費」採択】 一般研究（松川班）	研究課題 モンゴル国カラコルム博物館における歴史研究を基軸とした情報化と国際協働の推進 研究代表者 松川 節 研究員 松川 節（教授・モンゴル学） 協同研究員 清水 奈都紀（奈良大学非常勤講師）
【2014～2018年度「科研費」採択】 一般研究（柴田班）	研究課題 紋章との比較による系譜の図像化規則とその構造分析 研究代表者 柴田 みゆき 研究員 柴田 みゆき（教授・情報処理学） 三浦 誉史加（准教授・英文学・英米文化） 協同研究員 松浦 亨（北海道大学病院企画マネジメント部臨床教授） 杉山 正治（本学非常勤講師） 生田 敦司（本学非常勤講師） 清水 利明（財団法人比較法研究センター特別研究員） 横澤 大典（本学非常勤講師） 平塚 聡（立命館大学情報理工学研究科研修生） 齋藤 晋（NPO法人国土利用再編研究所副理事長） 寺岡 茂樹（中世日本研究所女性仏教文化史研究センター研究員）

研究名等	研究課題及び研究組織	
【2014～2017年度「科研費」採択】 一般研究（武田班）②	研究課題 研究代表者 研究員 協同研究員	アブラナ科植物の伝播・栽培・食文化史に関する領域融合的研究 武田 和哉 武田 和哉（准教授・歴史学・考古学・人文情報学） 三宅 伸一郎（准教授・チベット学） 渡辺 正夫（東北大学大学院生命科学研究科教授） 鳥山 欽哉（東北大学大学院農学研究科教授） 吉川 真司（京都大学大学院文学研究科教授） 横内 裕人（京都府立大学文学部准教授） 江川 式部（明治大学商学部兼任講師） 等々力 政彦（本研究所協同研究員） 清水 洋平（本学非常勤講師・特別研究員）
【2015～2016年度「科研費」採択】 一般研究（鈴木班）	研究課題 研究代表者 研究員 協同研究員 研究協力員(支援)	文化地質学：人と地質学の接点を求めて 鈴木 寿志 鈴木 寿志（准教授・地質学・古生物学） 廣川 智貴（准教授・ドイツ文学） 清水 洋平（本学非常勤講師・特別研究員） 石橋 弘明（本学聴講生）

【個人研究】

研究名等	研究課題及び研究組織	
【2012～2015年度「科研費」採択】 一般研究（清水班）	研究課題 研究代表者	タイ国を中心とする東南アジア撰述仏教説話写本の研究 清水 洋平（本学非常勤講師・特別研究員）
【2013～2015年度「科研費」採択】 一般研究（白館班）	研究課題 研究代表者	インド・チベットにおける般若学の研究 白館 戒雲（本学名誉教授・特別研究員）
【2013～2015年度「科研費」採択】 一般研究（高橋班）	研究課題 研究代表者	共感覚の進化的基盤を探る 高橋 真（講師・比較認知科学）
【2013～2015年度「科研費」採択】 一般研究（松下班）	研究課題 研究代表者	『中辺分別論』の未解説チベット語註釈写本の研究 松下 俊英（本学非常勤講師・特別研究員）
【2014～2016年度「科研費」採択】 一般研究（阿部班）	研究課題 研究代表者	移行期正義の社会的影響に関する比較社会学的研究 阿部 利洋（准教授・社会学）
【2014～2015年度「科研費」採択】 一般研究（佐々木班）	研究課題 研究代表者	依存に関する責任帰属を評価するための概念的基盤の構築 佐々木 拓（任期制助教・特別研究員）
【2014～2017年度「科研費」採択】 一般研究（田中班）	研究課題 研究代表者	ハンス・リップス解釈学におけるパトスを基盤とした知識教授理論の研究 田中 潤一（准教授・教育学・教育哲学）
【2014～2016年度「科研費」採択】 一般研究（中井班）	研究課題 研究代表者	生業の域内多様度とその形成過程：東南アジア大陸部におけるモン村落の事例比較 中井 信介（任期制助教・特別研究員）
【2014～2016年度「科研費」採択】 一般研究（福田班）	研究課題 研究代表者	初期チベット論理学成立史解明のための基礎研究 福田 洋一（教授・仏教学）

研究名等	研究課題及び研究組織	
【2015～2018年度「科研費」採択】 一般研究（井黒班）	研究課題 研究代表者	前近代中国黄河中流域における水利権と水利組織 井 黒 忍（講師・東洋史学）
【2015～2017年度「科研費」採択】 一般研究（上田班）	研究課題 研究代表者	傷痍軍人職業保護事業で整形外科医が果たした役割についての歴史的研究 上 田 早記子（任期制助教・特別研究員）
【2015～2017年度「科研費」採択】 一般研究（河崎班）	研究課題 研究代表者	『タットヴァールタースートラ』シッダセーナ注を中心とするジャイナ教の戒律解釈史研究 河 崎 豊（本学非常勤講師・特別研究員）
【2015～2017年度「科研費」採択】 一般研究（西沢班）	研究課題 研究代表者	口承と文献学の融合に基づくチベット後期中観思想研究 西 沢 史 仁（特別研究員）
【2015～2017年度「科研費」採択】 一般研究（古荘班）	研究課題 研究代表者	網島梁川を中心とした明治・大正期の宗教思想研究のための基盤構築 古 荘 匡 義（本学非常勤講師・特別研究員）
【本研究】 一般研究（番場班）	研究課題 研究代表者	タデウシュ・カントルの演劇と能に描かれた死の表象の精神分析理論による考察 番 場 寛（教授・フランス文化・フランス文学）
【予備研究】 一般研究（酒井班）	研究課題 研究代表者	情報検索分野を中心とした、可視化技法の応用に関する研究 酒 井 恵 光（講師・計算機科学）
【予備研究】 一般研究（箕浦班）	研究課題 研究代表者	アビダルマの因果論に関する総合的研究 箕 浦 暁 雄（准教授・仏教学）
【予備研究】 一般研究（宮崎班）	研究課題 研究代表者	隅寺心経の基礎的研究 宮 崎 健 司（教授・日本古代史・日本古代宗教史）
【予備研究】 一般研究（脇中班）	研究課題 研究代表者	触法知的障害者に対するピアサポート型な更生支援活動の実践とその評価 脇 中 洋（教授・発達心理学・法心理学）

# 2015(平成27)年度「一般研究」(新規採択課題)研究目的紹介

## 共同研究

### 文化地質学： 人と地質学の接点を求めて

研究代表者・准教授 鈴木 寿志  
(地質学・古生物学)

私たち人類は地球に生まれ、地球上に文化・文明を築いてきた。人類は地球人であり、その文化・文明は、必ず地球と関わりがある。しかも文明のほとんどは地球表層の地質の上に成り立っている。このように考えると、地質学は人と密接に関わる部分が多いはずである。

しかし、残念なことに地質学者のほとんどは、人と直接結びつく対象を積極的に研究してこなかった。古生物学者は太古の生命の復元に熱を上げ、岩石学者はマントル物質の高温高圧実験に暇がない。もちろんそれらの最先端研究は地球の理解に欠かせない重要な研究であるし、私もそういった類の研究に携わってきた。しかし、一般の人々の日常生活において、ティランノサウルスが何を食べていようが、地球深部の鉱物組成がどうなっていようが、実際のところ全く関係がない。

その一方で、近年の日本では地質に関わる自然災害が多く発生している。巨大地震が起こっては津波が沿岸の町を飲み込んでいく。集中豪雨が土石流を誘発し、下流の集落を破壊する。登山をすれば突如の火山噴火で噴石に襲われる。人々がこれらの地質災害に苦しんでいるにもかかわらず、地質学者の研究内容は、あまりに人からかけ離れているものが多い。

そこで私たちは、人々の生活や文化・文明と密接に関わる地質学研究の必要性を感じ、「文化地質学」を提唱することにした。具体的には、地質と農作物の関連から地域文化を考える、山岳信仰を通じて日本人の地質観を考察する、文学作品にみられる岩石や鉱物の記述から人々の地質の捉え方を探る、などの課題を研究する。これらの研究は、もちろん防災に直接役立つものではないが、地質が人と密接に関わっていることを示し、人々の大地への理解を深めることになるであろう。一般の人々に浸透した地質の理解は、自ずと乱開発を抑制し、地質災害の減災につながる。その意味で、文化地質学の研究は、現代文明を陰ながら支える縁の

下の力持ちのような役割を担うものと期待される。

## 個人研究

### 依存に関する責任帰属を 評価するための 概念的基盤の構築

研究代表者・特別研究員 佐々木 拓  
(倫理学・17-8世紀イギリス道徳哲学)

依存症addictionの問題は哲学・倫理学の領域においても古くから論じられてきた問題の一つである。そこでは、依存症は行為者の「意志の弱さ」の問題であり、依存行動によって生じた事柄に対しては、行為者は完全に責任を負うと考えられてきた。その一方で、近年では特に脳神経科学の進歩のおかげで、薬理学や心理学の観点から依存症のメカニズムの解明が進められている。この結果、「依存症はある種の(脳の)病気であり、それゆえに依存行動には責任を負わない」という理解がこの領域では広まっている。また、後者の理解は依存症患者の社会的な扱いを変化させつつもある。例えばわが国では「薬物使用等の罪を犯した者に対する刑の一部の執行猶予に関する法律」等が成立するなど、依存症患者が犯した違法行為の責任の一部を免除し、刑罰よりは治療へと依存症患者の扱いを変化させる動きがみられる。

さて、このような社会状況を前にすると、従来の哲学・倫理学的理解は状況に逆行するように見える。その理由は両者の依存症の理解がそもそも対立しているためである。本研究の目的は、この対立する依存症理解を調停し、依存症にまつわる責任を説明できるような概念枠組みを提出することにある。これにより、依存症に付与されている偏見を取り除くとともに、依存症患者を少しでも多く治療へと導き、社会的取扱いを改善するような依存症理解を提案することが本研究で目指す最終目標である。

この課題を達成するのは、哲学よりはむしろ脳神経科学のような実験科学だと考えられるかもしれない。しかしそれは誤りである。というのも、問題となっているのは単なる責任免除の枠組みではなく、責任の「部

分的免除」を可能にする枠組みだからである。われわれは依存症患者の依存(関連)行動に関して責任を免除するだけでなく、その他の行動に関しては依存症患者に責任能力を全面的に残すような枠組みを作らなければならない。このために、本研究では人間の責任能力を二つに区別する。ひとつは、人間が基本的に備え、行為全般に際して行使している「全般的能力」である。もうひとつは、個別の状況において行使されるような「局所的能力」である。実験科学は後者へのヒントを与えてくれるかもしれないが、前者の問題を扱うことができない。本研究では実験科学の知見に加えて、哲学的議論から普遍的な人間理解を取り出すことで、二つの能力の同定を目指す。

## 個人研究

### 前近代中国黄河中流域における水利権と水利組織

研究代表者・講師 井黒 忍  
(東洋史学)

近代科学技術の登場以前においては、需要量増加への対策は物理的供給量の増加ではなく、利用者間においていかに過不足を調整し、その利用効率を高めるかという点に求められた。前近代中国において過不足調整の対象となるのは水資源に対する認識を具現化した水利権であり、水資源管理の主体となるのは地域社会の水利組織であった。これらはそれぞれの地域の自然環境や歴史性を反映して異なる形態、内実を備えるものであり、水資源に対する伝統的観念や地域性を色濃く映し出すローカルナレッジそのものともみなし得る。本研究においては、水利権および水利組織の具体像の解明を通して、持続的な水資源分配の将来型モデルを構築する上でローカルナレッジが果たしうる役割を提示することをねらいとする。

本研究の具体的な目的は、15～19世紀の中国黄河中流域(陕西省東部・山西省南部・河南省西部)において、1) 水利権がいかに認識され、売買・貸借などの契約関係の中でどのように取り扱われたのか、2) 民間の水利組織がどのように成立し、水資源の管理・分配および水利権移転にいかなる役割を果たしたのかの二点を明らかにした上で、3) 異なる地域間の比較を通し

て、資源管理システムとしての持続性の差異とそれぞれの歴史的意義を評価することである。

当該の時代および地域を取り上げる理由は、黄河や汾河、渭水といった大河川の流域にありながら、地理的要因によりその利用がかなわず、泉・湖・ため池・井戸などの中小規模の水資源に依存せざるを得なかったため、水利組織が管理・分配に大きな役割を担うとともに、水利権の売買・貸借が早くから行われた地域であることによる。さらにそれら具体的内容を豊富に現存する水利関連の碑刻資料によって分析することができる点も重要である。隣接する地域の事象を取り上げて比較検討を行うことにより、地域的な特性や固有の問題点を抽出することができるだけでなく、地域を越えて共通する普遍的な特徴や時代を貫く問題点などを明らかにすることが可能となる。また、水資源管理に関する制度的持続性を比較検討し、長期持続性を有するシステムのあり方を明らかにする。本研究は過去の事象の解明に止まらず、将来型の持続可能な水利用モデルを構築するための一助となることを目指すものである。

## 個人研究

### 傷痍軍人に対する職業再教育と整形外科学の相関関係

研究代表者・任期制助教 上田 早記子  
(社会学)

現行の障害者に対する支援は戦後になり突如として出現したわけではなく、戦前における取り組みが時と共に蓄積、発展し、現在の形となっている。しかし、戦前と戦後との繋がりについて明らかになっているものは少ない。障害者の就労支援を遡ると江戸時代の三弦や三療、明治時代における特殊教育などをあげることができる。そのうち傷痍軍人に対する職業保護は、他とは異なり軍人対策という限界や傷痍軍人のみを対象としているという限界があるものの、急激に推進され、多様な対策が講じられていった。そして、傷痍軍人に対する職業保護は現行の障害者の就労支援と類似する対策が国によって講じられており、現行の就労支援対策との繋がりを考えていく上での歴史的位置付けは大きいといえる。

本研究は、過去と現在を繋げることを目的とし、傷

傷痍軍人に対する職業保護を取り上げ、傷痍軍人に対する「職業保護」と戦後の障害者に対する「就労支援」との繋がりを明らかにするものである。

傷痍軍人の職業保護対策としては、職業補導や職業準備教育、就職斡旋などがある。本研究では、特に職業補導を実施していた傷痍軍人福岡職業補導所を取り上げ、九州帝国大学の整形外科医である神中正一や稗田正虎が関与したことによって、①義肢などの機能を向上させ、②義肢の装着後の訓練を改善し、③作業訓練を開発した結果、傷痍軍人に対する就労支援技術が急速に向上したことを明らかとする。その上で、戦中に開発改善した技術が戦後、新たな分野である理学療法や作業療法、職業準備訓練（障害福祉分野の就労支援）と名乗り、引き継がれていったことを明らかとする。

本研究は主に写真や日記、記録など様々な文献を用いる文献研究である。但し、当時の傷痍軍人福岡職業補導所について知っている現存者がいる場合は、①傷痍軍人福岡職業補導所での就労支援内容、②整形外科医の業務等について聞き取り調査を実施する。

## 個人研究

### 『タットヴァールターストラ』 シッダセーナ注を中心とする ジャイナ教の戒律解釈史研究

研究代表者・特別研究員 河崎 豊  
(インド学・仏教学)

ジャイナ教を際立たせる特徴は、不殺生を筆頭とする6つの禁戒（ヴラタ）を軸にした、厳しい戒律の遵守である。彼らの戒律観を研究することはジャイナ教を深く知るために必須であり、様々な視点から研究がなされてきた。しかし、『タットヴァールターストラ』（TS）への諸注釈を軸とした戒律の検証は極めて低調であり、白衣派系諸注釈については翻訳すら存在しないのが現状である。周知の如く、ジャイナ教初の教義綱要書たるTSは、白衣派・空衣派の双方から権威とされ、多くの注釈書が作成された。当然その解釈は各派にとって正統な教義を前提とするため、解釈一覧は論争史の様相を呈する。これは戒律解釈で特に顕著であるため、TS諸注釈の厳密な研究は戒律解釈史の検証には不可欠である。そこで本研究は、白衣派における最初の本格的

注釈であるシッダセーナ注を世界に先駆けて取り上げ総合的な研究を行なうことで、今後この種の研究の雛型のひとつたらんことを目指す。具体的な研究内容は以下の通りである。

①翻訳研究と語彙集の作成：戒律解釈が多く見られるTS7章へのシッダセーナ注及び関連する諸記述に対し日英語で訳注研究を行ない、かつ重要な語彙を選定して語彙集を作成し、基準訳語を提案する。②空衣派系TS諸注釈との比較：白衣派と顕著な解釈の相違を示す空衣派系諸注釈との比較が必要である。時代的にシッダセーナと近接するプージュヤパーダ及びアカランカの注釈を対象とする。③シッダセーナ以前の白衣派文献の調査：シッダセーナ以前の白衣派系諸資料における類似の記述を調査し、シッダセーナの思想を白衣派の伝統の中に位置づける。研究年限を鑑み、白衣派聖典および確実にシッダセーナ以前に遡る聖典注釈群の『ニツジュッテイ』、『バーサ』、『チュンニ』を対象とする。④電子テキストの作成と公開：今回扱う諸資料には十分な語彙索引が存在しないため、電子テキストを作成し公開する。⑤現代とのつながり：現代白衣派教徒が遵守する諸生活規定の内実と、8世紀までの禁戒の諸解釈の異同を検証することは、ジャイナ教教史の構築に不可欠である。そこで現代における禁戒の実践を調査し、比較対象とする。

## 個人研究

### 情報検索分野を中心とした 可視化技法の応用に関する研究

研究代表者・講師 酒井 恵光  
(計算機科学)

本研究では、情報の検索結果の表示に制約ベースの可視化の手法を適用し、ユーザによる検索条件の設定を支援し、対象に応じてより有効な可視化を容易に行えるようなシステムの基盤構築を目的とする。

制約ベースの可視化では、抽象的な概念・関係を図上の位置関係などの制約に変換し、その制約を解くことで図を生成する。この際、元データの関係と図上の制約との間のマッピングを切り替えることで、多様な図表現を切り替えることが比較的容易に実現できる。この技法を、情報の検索結果の表示に適用することで、

ユーザの要求に応じ、検索結果をより目的に合った形で可視化することが期待できる。また、同じ検索結果であっても、状況に応じてその結果を異なる形で可視化することにより、異なる側面からの情報の分析をより行いやすくすることも考えられる。

このような、制約ベースの可視化を、より効果的な形で情報検索の分野に適用するには、対象となるドメインに対して、どのような要求があり、それをみやすためにどのような図表現が有効であるかを分析する必要がある。また、ドメインに応じ、システムの運用形態が異なってくるため、どのようなインターフェイスが有効であるかの分析・評価も必要となる。

本研究では、システムの実装実験を通じてこれらの点を明らかにし、検索支援のための汎用的な可視化基盤システムを構築することを目的とする。

## 個人研究

### 口承と文献学の融合に基づく 後期中観思想研究

研究代表者・特別研究員 西沢 史仁  
(仏教学・チベット学)

本研究の目的は、チベットに伝承された中観思想の成立とその歴史的展開を解明すべく、特に十五世紀以降のゲルク派の中観文献を主資料として、そのための研究の基礎付けを行うことである。具体的には、チャンキャ(1717-1786)の『教義書』中観派章とセラジェツウンパ(1469-1544)の『中観総義』の読解と翻訳作業を通じて、インド及びチベット初期中観文献との比較対照を行い、その思想的前提と独自性を解明することを目標とする。方法論的には、従来のText Critiqueに基づく文献学的手法のみに基づくのではなく、研究代表者の十年間にわたるチベット僧院(セラ寺及びデブン寺)修学経験を生かし、そこで収集した口承情報を十二分に活用した新しい仏教教学研究の方法論の構築を試みる。これをもって、今後のインド及びチベット中観思想史研究の予備的研究となす。

『教義書』中観自立派章は、2006年にセラ寺ジェ学堂のゲシェ・ガワンサンギェ師の下で聴講し、『教義書』中観帰謬派章及び『中観総義』は、2008年に同師の下で聴講した。その際、その講義の録音、備忘録の作成、部

分的な試訳は講義聴講中に遂行したが、まだ、翻訳及び註記の作成は未完の状態である。中観派章には、ロベツヤホブキンスの英訳(部分訳)があるが、特に文献学的見地から再検討する必要がある。それ故、まずは、『教義書』中観派二章の訳註研究の完成に務める。なぜならば、同書には、中観派の基本教義が簡潔な形でほぼ網羅されているので、この作業を通じて、チベット後期中観思想の全体像を俯瞰することが可能となるからである。

同時に『中観総義』の研究にも着手するが、チベット後期中観思想の思想的前提を解明するために、チャパヤパツァブ・ニマタク等の初期中観文献の研究やサンブ寺ニマタン学堂の学僧シェーラプジンパの中観文献の研究も平行して行う。

特に、シェーラプジンパ造『中観学説決択集』(写本:大谷大学所蔵西蔵蔵外文献叢書)は、これまで殆ど未研究であり、またその全体が難解なクニイク(隠字体)で記されているので、テキストを正書体に直す作業から取りかかる予定である。その為に、チベット古写本研究会(仮名)を発足して、三宅伸一郎連携研究者(大谷大学准教授)の協力の下で同テキストの解読と、さらには、クニイクのデータベース作成なども予定している。

## 個人研究

### 綱島梁川を中心とした 明治・大正期の 宗教思想研究のための基盤構築

研究代表者・特別研究員 古庄 匡義  
(宗教哲学)

本研究の目的は、綱島梁川(1873-1907)の資料や二次文献の整理・分析を通して、綱島を中心に形成された独自の宗教的な共同性と、綱島が明治・大正期の宗教思想に与えた影響を解明することである。

綱島は明治期の宗教的な共同性のあり方を考える上で重要な思想家である。彼は、大学時代に受容した西洋哲学を基に文芸批評や倫理学研究を展開していたが、結核の闘病生活で死に直面するなかで、宗教に関する思索を深めていった。さらに、「見神の実験」という神秘体験を経験した晩年の綱島は、キリスト教に根ざしつつもさまざまな宗教や思想を取り入れて、自らの神

秘体験を言説化していった。そして、この網島の言説に惹きつけられた多くの人々が、網島とともに、宗教・宗派に囚われない宗教的な共同性を形成した。たとえば、彼の生前から彼を顕彰する「梁川会」が各地に形成され、さらに、網島の死の直前に開始された回覧ノート、『回覧集』が、網島の死後約3年もの間、彼を偲ぶ人々によって書き連ねられた。このような共同性は、特定の宗教・宗派によらないゆるやかなもので、清沢満之を中心とする「浩々洞」や、内村鑑三を中心とする「紙上の教会」と比べても独自性を有している。したがって、網島を中心とする共同性の解明は、明治期の宗教実践の多様性を明らかにする上で必要不可欠である。

しかし、網島の思想的実践の解明は、必要な資料が十分に整理・公開されていないため、進んでいない。つまり、網島自身の思想は『梁川全集』所収の文章で解明できるが、網島と彼を慕う者たちによる思想的実践の全容を解明するために必要な『回覧集』などの未公開資料が整理されていないのである。

そこで、本研究は網島の未公開資料を整理・翻刻し、網島の実証的研究の水準を引き上げるとともに、網島が後世の宗教実践や思想に与えた影響を明らかにする。具体的には、次の3点を実施する。①網島に関する資料の整理を行い、実証的な網島研究を行うための基盤を構築する。②網島の資料や、網島を論じる明治・大正期の文献を分析することを通して、網島が明治・大正期の宗教や思想に与えた影響を解明する。③『回覧集』を翻刻・分析し、網島を中心に形成された宗教的な共同性のあり方を明らかにする。そして、この共同性の独自性を、清沢満之や近角常観、内村鑑三の周囲で形成された共同性と対比することによって解明する。

満ちている。生誕100周年を迎える2015年には記念イベントが世界と日本で開催されることが予告されている。このカントルの劇の特異性を、死者が舞台の後半に現前する日本の能と比較することで、時代と国を隔てた文化の差異が浮き彫りになる以上に、人間の精神の普遍性が明らかになると思われる。そのため、筆者が長年取り組んできたJ. ラカンの精神分析理論を作品解読の手段として、カントルの劇作品と能に読み取れる人間の精神の普遍性を解き明かしたい。

カントルは自分の劇作品を「死の演劇」と宣言している。他方、日本の「能」はカントルの劇と並んで「死者」が現前する劇という世界的に見ても異なる劇である。影響関係は皆無に近いと思われ、一見、類似点はないように見える二つの演劇形式は、別の視点から見ると本質的な共通点があるように思える。それはこれらの西洋と日本の劇作品には「死の表象」が「反復」という形式を伴って現れている点である。

カントルの主要な作品、特に『死の教室』、『私は決して戻らない』、『芸術家よ、くたばれ』、『ヴィエロポーレ、ヴィエロポーレ』と、能の幾つかの作品、『葬上』、『清経』等に見られる「死」の表象を、キリスト教、ユダヤ教、仏教という世界観の下に比較検討するとき、ラカンの精神分析理論の「死の欲動」「欲望」「反復」等の概念が舞台上でどのように現れているかを明確にする。さらに世阿弥が佐渡に流されたことをきっかけにして現在に至るまで土地の人により伝承されている薪能をも調査・研究することで、西洋と東洋という、しかも時代を隔てた作品に見られる、文化の違いに起因する差異と同時に、共通点をも探る。

互いに影響関係はないと思われる時代を隔てた東西2国間に生まれた、カントルの演劇と能には、まったく異なった文脈において生成発展した演劇のテーマ、演出として「死の表象」が見られるという共通点に着目することで、両文化の根底に横たわる「死」という観念に対する本質的な差異が、歴史的、宗教的背景の差異として発見されると同時に、そうした差異を超えて現れる、人間が「死」に対して抱く観念の「普遍性」も精神分析理論という視点のもとに明らかにされると思われる。

## 個人研究

# タデウシュ・カントルの演劇と能における死の表象の精神分析理論による考察

研究代表者・教授 番場 寛  
(フランス文化・フランス文学)

サミュエル・ベケットと並んで20世紀の世界の演劇界に衝撃を与え、現在も影響を与え続けているタデウシュ・カントル(1915-1990)の演劇は「死」の表象に



## 個人研究

アビダルマの  
因果論に関する総合的研究研究代表者・准教授 箕浦 暁雄  
(仏教学)

アビダルマの因果論に関する研究は未開拓の領域というわけではないが、文献の翻訳や紹介に留まっていたりせずとも十分とは言えない。全体像が把握されていない文献の解説、すでに翻訳・紹介されてきた文献のさらなる分析を通して、アビダルマの因果論に関する議論が持つ思想史上の意味を検討することが求められる。

アビダルマの因果論に関する総合的研究を推進するために扱わなければならない文献は多岐にわたる。ただし、本研究では、未解説の日本のアビダルマ関係の註釈書・講義録に限定して、調査・整理を行う。具体的には、大谷大学所蔵の江戸期の講義録である『五蘊論聞書』（口述者・著者不明）を翻刻し公開することを目指す。また、金沢市図書館に〈近世資料〉として江戸期の阿毘達磨関係文献（釈環定著『大乘五蘊論聞記』）が保管されていることを確認しているので、当該文献を調査し、資料的価値を見極めたうえで解説研究に取りかかる計画である。

これらの文献は共に、ヴァスバンドウの『五蘊論』の註釈である。ヴァスバンドウの『五蘊論』と、ステイラマティの『五蘊論註』、両文献のサンスクリット写本がチベット自治区に保管されていて、近年校訂出版された。江戸期の註釈書・講義録が、両文献の解説に資するものであることは言うまでもない。当該文献のなかに因果論に関するまとまった議論が見いだされるわけではない。しかし、『五蘊論』の註釈書には、因果論を読み解くのに重要な法(dharma)の概念規定に関する言及がある。因果論の詳細な分析には、それぞれ関連する法の概念規定に関する記述を正確に把握しておく必要がある。これまでの仏教の因果論研究の領域において、このような文献解説の成果の重要性にあまり注意が払われてこなかった。因果論の詳細な検討に必要な法の概念規定箇所の整理ができれば、それはアビダルマの因果論研究において極めて意義のある基礎資料を準備することになる。

アビダルマの因果論というのは、苦悩する存在であ

る人間について十全に語ることに果たして成功しているのだろうか。このような問いを持ち、アビダルマの因果論が持つ仏教思想の意味を明らかにするという最終目標からすれば、本研究は正面きって因果論を扱う文献を考察対象とするのではなく、一見因果論解明と直接関係がない文献を扱うように見えるかもしれない。しかし、それは、研究計画を着実に遂行し成果を得るために、あえて小規模で限定的なものに留めているからである。先に言及した『五蘊論』関係文献の解説は、アビダルマの因果論全体像を明らかにするうえで極めて重要な部分を担うものである。この研究成果は、論文として纏めて報告する予定である。

## 個人研究

## 隅寺心経の基礎的研究

研究代表者・教授 宮崎 健司  
(日本古代史・日本古代宗教史)

本研究は、奈良時代の古写経や写経所文書（正倉院文書）にみえる写経事業を通し、当該期の仏教史を明らかにしようとする意図のもと、空海書写で奈良県の隅寺（海龍王寺）に伝来したとする「隅寺心経」の歴史的意義を明らかにすることを目的とする。

隅寺心経は、空海の書写と伝承される古写経群であるが、書写年代は奈良時代と考えられ、写経所文書の研究から「年料多心経」と称される『般若心経』の書写事業の遺巻である可能性が指摘されている。しかし、隅寺心経の書誌的状况は一律ではなく、多様な状況を示している。一方、写経所文書からは「年料多心経」以外にも隅寺心経を想像させる『般若心経』の書写事業がみえ、隅寺心経は複数の写経事業による古写経群と考えるべきである。そこで隅寺心経の歴史的な位置づけを明らかにするには伝存する隅寺心経を集成、分析し、分類することが重要な課題といえるが、研究代表者はすでに所在未確認を含め多くの遺巻情報を集成しており、当該研究遂行の準備は整っている。

当該研究では、まず未把握の遺巻の搜索と、把握している所在情報の確認、さらに現物の調査をおこなって詳細な書誌情報の集積につとめたい。その上で、集積した書誌情報をさまざまな観点から比較、分類し、伝

存する遺巻を分類していくことにする。そして、特に写経所文書にみえる「年料多心経」に関する遺巻を特定することを第一にめざしたい。

奈良時代の写経事業は、写経所文書研究の進展で多くの写経事業が明らかにされている。とりわけ、光明子発願一切経（五月一日経）は、正倉院聖語歳はじめ多くの遺巻が伝存し、写経所文書にみえる写経事業と遺巻と対応関係が鮮やかに示されている。遺巻の現物調査による詳細な書誌情報は、写経所文書の解釈にも大きな影響を与えると考えられ、写経所文書研究と現物調査があいまって写経事業研究を深化させることで、奈良時代の仏教史研究に重要な資料を提示しうるものといえる。

本研究の成果は、「年料多心経」などの『般若心経』の写経事業に対応する遺巻を特定することはいうまでもないが、さらに年紀や願文など奥書・識語をもたない古写経群を写経所文書にみえる写経事業の遺巻に同定する方法論を見出す可能性を有しており、その点においても学術的意義は高いと考える。

## 個人研究

### 脳法知的障害者に対する ピアサポーターな更生支援活動の 実践とその評価

研究代表者・教授 脇中 洋  
(発達心理学・法心理学)

本研究は、知的障害が疑われる受刑者に対して、矯正施設における更生や矯正施設退所後に地域生活定着が促進されることを目指した支援活動として、ピアサポーターなプログラムを実践し、プログラム内容を練成しながらその評価を行うものである。特にピアサポーターな支援活動としてのクラウニング講座を基幹に据えた実践研究を着想した。

本研究計画では、播磨社会復帰促進センター特化ユニットで障害受刑者更生プログラムの導入として位置づけられているクラウニング講座の効果に着目し、その効果を検証するとともに可能な範囲を見定めてその社会的実装を目指す。

もちろんピアサポーターな活動は、当事者や施設職員個人が研修によって習得する能力のようなそれ自

体で完結したプログラムではなく、他の受刑作業や生活支援と連動することによってその効果を発揮する。

そこで矯正施設や更生保護施設、障害者福祉施設の職員を含めた組織間連携の下での調査研究を図ることとし、2014年1月には播磨社会復帰促進センターおよびクラウニング講座を実施する社会福祉法人かがやき神戸と共同研究協定書を締結するに至った。

本研究では矯正施設と退所後の双方にわたるピアサポーターな支援活動としてクラウニング講座プログラムを練成・発展させて行く。これらの最終的效果（地域での就労または安定的生活）の確認には数年を要すると見込まれるが、本研究では、矯正施設内における効果検証を中心的課題として、可能な範囲で退所後のクラウニング講座の試行的実践を進め、当事者の縦断的な効果検証や、カナダの更生保護との比較検討を行い、ピアサポーターな更生支援が達成できる諸条件を明らかにする。

具体的には、(ア)播磨社会復帰促進センターでのクラウニング講座の効果検証、(イ)京都更生保護会や出所者を受け入れている障害者施設等におけるクラウニング講座の試行的実践とプログラムの練成、(ウ)カナダ・ヴィクトリアのハーフウェイハウス (Bill Mudge House 他)における更生保護事業との比較検討を行う。

また、その中で出会って了解を取ることができた当事者に対して、可能な範囲で縦断的な経過を記録するとともに、関係する矯正施設や障害者施設の職員による評価も記録する。

#### 文献

独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園 (2014) 「福祉の支援を必要とする矯正施設を退所した知的障害者等の地域生活を支える相談支援を中心とした取り組みに関する調査・研究報告書」厚生労働省平成25年度セーフティネット支援対策当事業費補助金社会福祉推進事業

法務省HP. 矯正統計統計表新受刑者の罪名別能力検査値 (2014) <http://www.e-stat.go.jp/>

日本犯罪社会学会 (2009) 『犯罪からの社会復帰とソーシャル・インクルージョン』現代人文社

内田扶喜子・谷村慎介・原田和明・水藤昌彦 (2011) 『罪を犯した知的障がいのある人の弁護と支援司法と福祉の協働実践』現代人文社

## 海外学会報告

### アメリカ宗教学会に参加して

国際仏教研究 研究員・講師 マイケル・コンウエイ

アメリカ宗教学会 (American Academy of Religion) の年次大会は、2014年11月22日(土)から11月25日(火)までカリフォルニア州南部のサンディエゴ市で開催された。2015年6月26日～27日に開催予定の『*Cultivating Spirituality*』出版記念シンポジウムの発表者との打合せを兼ねて、アメリカにおける宗教研究、とりわけ仏教研究の動向を把握するために大会に参加してきた。

アメリカ宗教学会は、100年以上の歴史を持つ組織で、現在は北米を中心に9000人以上の会員から構成されている。年次大会には例年、7000人近くの宗教研究者が集い、研究発表と交流が行われている。大会は、神学を軸にした聖書文献研究協会 (Society of Biblical Literature) の年次大会と同時同所で開催され、宗教現象を記述的に扱う宗教学、宗教史学の研究者とともに、各宗教の聖典を規範的に研究している学者も参加する。

2014年の年次大会は、サンディエゴのコンベンションセンターとその周辺のホテルを会場に開催され、4日間の日程で、400回に及ぶ正規の研究発表セッションが行われ、それに加えて関連団体のイベントや部会も多く設けられた。アジアの諸宗教を様々な角度から取り上げる発表も多数で、今回は日本の仏教に関連する部会を中心に参加した。

仏教学関連の発表は、おおむね二種に分けられていた。日本で親しまれている従来の仏教文献学の発表は、主にインド・チベットの言語圏の文献を題材に行われる一方、民俗学、文化人類学、宗教社会学の方法を取り入れた研究成果が、近現代のアジア諸国を題材に発表されていた。前者の発表では、仏教の教義学について綿密な研究がなされ、質疑応答の議論も活発に展開されており、北米におけるサンスクリット語・パーリ語文献研究の伝統が強く残っているように思われる。しかし、東アジアの領域では、テキスト解読を中心とした体系的教義学研究は少なく、歴史的現象として仏教が社会の様々なレベルでどのように作用していたのかを課題とする研究が主流となっている。その傾向の延長線上に、「近代仏教」に対する関心が、日本に劣らず高まっており、特に若い研究者の間では、超国家的社会現象として19世紀・20世紀における近代的仏教の創出が課題として追求されている。

北米の大学に在籍しながら博士論文執筆のために来日し、大谷大学で研究を行った後、北米の大学に就職した若手研究者の多くも今回のAARで発表していた。2009年から2010年にかけて宮崎健司教授のもとで奈良時代における写経について研究していたブライアン・ロー氏 (バンダービルト大学准教授) は、23日の午後奈良時代の儀礼に関する発表をした。同時期に佐賀枝夏文名誉教授のもとで真宗の坊守に関して研究していたジェシカ・スターリング氏 (ルイス・アンド・クラーク大学准教授) は、25日の午前中に現代の在家仏教運動と寺院との緊張関係について発表した。また、2007年から2009年まで泉恵機客員教授のもとで大谷派における差別問題への取り組みについて研究していたジェシカ・メイン氏 (プリティッシュ・コロンビア大学准教授) は真宗教団が推進したスカウト運動について発表した。いずれも大谷大学にいた頃の経験を活かし、当時の研究課題を更に展開させた形で活動を続けている。

関連部会として、北米の大学における日本宗教を紹介する選択科目の担当者が集まり、4名の教授から発表がなされ、授業の持ち方について意見交換が行われた。日本についての予備知識に乏しい学生を相手に、日本の宗教を概説的に紹介するときの困難を痛感したと同時に、「日本の宗教の教義など詳細な内容については授業で触れない」といった複数の発表者の発言に強い違和感を覚えた。北米の高等教育機関において、世界文化の多様性について学生の意識を高め、自国の文化の様々な前提を問い直すきっかけを提供することが人文科学の教授陣から要請されているようで、このような概論では、日本の宗教の思想、歴史や実情を伝えることよりも、アメリカ社会で問題となっていることと日本宗教とを関連付けることを通して、学生にアメリカ文化の相対性を認識するように促すことが重点となっている。本末転倒という感じは否めないが、北米の高等教育の現状の一端を窺うことができる貴重な経験であった。

今回の出張で『*Cultivating Spirituality*』出版記念シンポジウムの在米発表者と打合せを行うこともできた。21日の晩に、本書の共編者マーク・プラム氏 (カリフォルニア州立大学パークレー校教授・国際仏教研究班嘱

託研究員)と面談し、22日に控えていた他の発表者との会合の準備を行った。そして、22日にブラム氏、ジェームズ・ドビンス氏(オバリン大学教授・国際仏教研究班嘱託研究員)、メリッサ・カーリー氏(アイオワ大学

准教授)にシンポジウムの全体の構想について説明して、先生方からシンポジウムでの発表内容について詳細を伺った。

## 海外研究調査報告

### 北部ベトナムにおける主要寺院と 日本語教育・日本語研究に関する調査報告

「ベトナム仏教研究」チーフ・教授 織田 顕祐

ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との共同研究実施に関する打ち合わせと、ベトナム北部地域の主要寺院、及びハノイ市内の有力大学における日本語教育・日本文化研究の現状を調査するため、研究代表者織田顕祐と研究員箕浦暁雄が、2015年3月12日～16日の日程で現地を訪問した。以下にその内容を報告する。なお報告は日程順ではなく、内容ごとに報告する。

宗教研究院との打ち合わせは、細かい点に亘るのでここでは省略し、後半の寺院調査と大学訪問の二点について報告する。今回調査した寺院は、限られた日程の中で最も有効なフィールドワークが可能ないようにと宗教研究院側によって選定されたものである。

バグザン省普陀寺(ボーダー寺)では、釈統栄(トゥク・ヴィン)住持に話を聞くことができた。「普陀」は観音信仰の普陀落の略であるが、ファン・キン・フン(潘金興、1720年代の官僚)が中国の観音霊場で修行したことで、当寺が特に知られるようになったとのこと。それとは別に1740年代からこの地域の学問寺院として栄えたようである。版本の保存状態は最悪であるが、未知の典籍が相当数ありそうである。例えば「梵網経略疏 広州象林沙門弘賛述」という典籍を確認したが、日本の目録等には一切記述がない。当時の僧侶の生活規範に関する著作であると思われるが、こうした書物は相当量あり、ボーダー寺の版本版本の内容調査は今後の課題である。

次にハイズオン省安寧寺(アンニン寺)では、釈統芳(トゥク・フォン)住持に話を聞くことができた。



ハイズオン省 安寧寺(アンニン寺) 祖堂

ランソンを経由する北部地域ではボーダー(普陀)寺とアンニン(安寧)寺が中心的指導寺院として特に重要であるとのこと。「普陀安寧沙門部」という、教団運営と僧侶の生活を監督する責任を持った寺院であった。ここに保存される版本版本はそのために作成されたもののようである。

ハイズオン省青梅寺(タインマイ寺)では、「青梅円通塔碑」を実地調査した。陳朝ベトナムの禅宗で竹林派の第二祖とされる「法螺禪師」の碑である。陳朝はベトナム国の草創にかかわった重要な時代で、日本の鎌倉時代後半に相当する。日本でも禅宗が盛んになった時代で、両国の禅宗はともに中国をその源流としている。両者の関係について今後大いに調査研究する必要がある。

ドーソン(塗山)市の祥龍塔寺は、ベトナム最初期

の李朝時代にアショカ王塔(祥龍塔)が建立されたと伝えられる寺院である。塔跡に「李家第三帝龍瑞太平四年制」という年紀の入った煉瓦が散乱しており、その事実を確認することができた。龍瑞太平四年(1057)は、日本の平安中期に相当するが、少し前から呉越の銭弘俣が作成した「アショカ王舍利塔」が将来され、人々の信仰を集めている。当時の東アジアは、極めて不安定だったはずであり、この時代に突如として両国にアショカ王信仰が登場する背景には一体何があったのか。学問的興味が喚起される。

次に、ハノイ市内の大学訪問について報告する。タンロン(昇龍)大学は1988年創立で、数学、IT、経済、外国語、健康、人文科学6学部約1万人が学ぶ総合私立大学である。日本語科は外国語学部所属し、日本語科を専攻する学生と第二外国語として学ぶ学生に分かれ、総数で約800人が日本語を学んでいるとのこと。

リエン学科長は、①現代ベトナム人が漢字を使わないこと、②日本語が複雑で文法まで進まないこと、③学生の勉学動機(日本企業に勤めて高給を得たい)などを挙げ、日本文化・宗教にまで関心を持つ学生は極めて少数であると言われた。ハノイ人文社会科学大学では、フィー(潘梨輝)先生と懇談した。同大学は「ハノイ国家大学」の一カレッジに相当し、約1万人の学生が学ぶとのこと。東洋学部日本学科は本来研究者養成を目的として設立され、現在の定員は24名である。日越間の学術的翻訳作業のためには、まず学生の留学プログラムを作り、その上で翻訳作業に進むという順序が必要であると指摘された。日本学科では「ハノイ国家大学附属人文社会科学大学東洋学部日本学科編」の、日越二カ国語で読むことのできる「日本研究論文集」を毎年発行しており、参考として2冊頂戴した。以上が、今回調査のほぼ概要である。

## 学術交流協定に基づく共同研究

### 中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定に基づく共同研究、及び公開研究会開催について

国際仏教研究(東アジア班) 研究員・准教授 松浦 典弘

本学真宗総合研究所と中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定が締結され、協定年限の5年が経ち一つの区切りがついた。本年度も相互に訪問し、共同研究を行い有意義な成果を上げることができた。

まず、中国社会科学院歴史研究所からは、11月17日～18日の日程で、王啓発研究員・雷聞研究員・朱昌栄副研究員を招聘した。先生方が到着された17日の夜には、松川節真宗総合研究所長主催の歓迎会が開かれた。本年度で年限の切れる協定の今後のあり方などについて意見交換が行われ、和やかな雰囲気のもと、相互の親睦を深めた。

ついで、18日13時より公開講演会が開催された。王先生は「『牟子理惑論』中に見える老子」、雷先生は「太清宮道士吳善経と中唐長安道教」、朱先生は「程朱理学と清初の社会再建」と題して、それぞれ報告された。先

生方の御報告は何れも中国思想に関するものであり、道教や儒教に関する史料を緻密に扱われた最新の成果



公開研究会(1月27日 北京)



協定調印式（左：卜憲群所長、右：松川所長）

を公表していただき、我々仏教関係の研究をする者にとっても刺激的であり、興味深い内容であった。

今回、先生方はあとに東京での研究活動を控えておられたため、18日夕刻には京都を発たれるというあわただしい日程であったが、短い中にも双方にとって有意義なひと時が過ごせたことであると思う。

一方、本学からは、1月24日～28日の日程で、松川節

教授（真宗総合研究所長）と、松浦が中国社会科学院歴史研究所を訪問し、共同研究を行った。この際、今後の共同研究の中で協力いただく村岡倫龍谷大学教授も同行した。

27日には午前9時より公開研究会が開催され、松川教授が「モンゴル仏典研究の現状と展望」、村岡教授が「大谷探検隊の記録から見る20世紀初頭のエルデネゾー寺院」、松浦が「新出の唐代尼僧墓誌について」と題して報告を行った。歴史研究所からは若手・中堅を中心に多くの研究者が集まり、各報告に対して有益なコメントが出された。

午後は前年度に来日された王震中研究員（歴史研究所副所長）を表敬訪問し、旧交を温めると共に、今後の交流について意見を交わした。

公開研究会に先立って、松川研究所長と卜憲群中国社会科学院歴史研究所所長との間で、交流協定の更新が行われ、さらに5年間、共同研究を続けることを確認した。これまでの成果を踏まえた上で、できるだけ早い時期に形に残る成果を出すことを目指したい。

# 2014年度「特定・指定研究」等研究成果報告会

真宗総合研究所主事・准教授 松浦 典弘

2015年3月6日(金)15:00~17:00、響流館3階マルチメディア演習室において、2014年度「特定研究・指定研究」等研究成果報告会が公開で行われ、草野顕之学長、松川節所長、各研究班の研究代表者など多数の参加者があった。報告内容の概要は以下のとおりである。

## 1. 特定研究

### 「教如上人研究」

研究課題：真宗大谷派・東本願寺開祖である教如上人に関わる史料の調査と研究

報告者：研究員・チーフ 福島栄寿 准教授  
研究員 川端泰幸 講師

- ①研究会の開催。
- ②真宗大谷派・浄泉寺本堂にて調査。
- ③一次史料を対象に、史料所在データベース作成。

## 2. 指定研究

### 【1】「清沢満之研究」

研究課題：清沢満之の生涯と思想の研究を更に進め、その成果を『清沢満之全集』の補遺として発刊する

報告者：研究代表者・研究員 藤原正寿 准教授

- ①1991~2003年度に活動していた清沢満之研究班が残っていた資料の収集と整理。
- ②真宗大谷派・長徳寺を調査、撮影した史料の翻刻。
- ③研究会の開催。
- ④求道会館へ研究調査出張、親鸞仏教センター主催「第一回清沢満之研究交流会」に参加

### 【2】「国際仏教研究」

研究課題：諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開

#### (1)英米班

報告者：研究代表者・研究員 井上尚実 准教授

- ①真宗大谷派北米開教区真宗センターから出版予定の『浄土の真宗』『宗門の歩み』の英訳に協力。
- ②オーストリアのウィーン大学で開催の第17回国際仏教学会大会に参加、発表。
- ③スロヴェニアのリュブリャナ大学で開催の第14回ヨーロッパ日本研究協会国際会議に参加、発表。
- ④カリフォルニア州サンディエゴで開催のアメリカ宗教学会2014年大会に参加。

#### ⑤公開研究会の開催。

#### (2)ドイツ・フランス班

報告者：研究員 藤枝 真 准教授

- ①2010年にフランス国立高等研究員で開催のシンポジウムの論文化とフランスでの刊行準備。
- ②マールブルク大学神学部ディートリッヒ・コルシユ教授の著書の出版を計画中。

#### (3)東アジア班

報告者：研究員 松浦 典弘 准教授

- ①中国社会科学院歴史研究所との共同研究、3名の研究者を招聘し公開研究会を開催、また、松川節所長と松浦研究員が先方を訪問し研究発表。

### 【3】「西藏文献研究」

研究課題：チベット語文献及びパーリ語貝葉写本のデータベース化

報告者：所長 松川 節 教授

- ①モンゴル国立大学との共同研究として、ヘンティ県・セレンゲ県で寺院調査を行った。また、研究者を招聘して、公開講演会を開催した。
- ②チベット語文献の電子テキスト化。
- ③寺本婉雅の日記の翻刻。

### 【4】「ベトナム仏教研究」

研究課題：ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との共同研究

報告者：研究代表者・研究員 織田 顕祐 教授

- ①『越日仏教辞典』編纂に先立ち、『日本仏教概説』の執筆を決定。
- ②バクザン省ピングエム寺所蔵の仏典版本調査。

## 3. 資料室

### 【1】大谷大学史資料室

整理課題：大学史関係資料の収集・整理

報告者：室長・研究所主事 藤田 義孝 准教授

### 【2】「東本願寺海外布教資料室」

整理課題：大谷大学図書館蔵「東本願寺旧蔵資料」海外布教関係部分の整理

報告者：室長 桂華 淳祥 教授

### 【3】「デジタル・アーカイブ資料室」

整理課題：大谷大学所蔵貴重資料のデジタル・アーカイブの構築

報告者：室長・研究所主事 藤田 義孝 准教授

真宗総合研究所彙報 2014. 11. 1 ~ 2015. 4. 30

■研究所関係

◎真宗総合研究所委員会

◇2015年1月6日(火) 12:20~ (博綜館 第4会議室)

1. 2015年度「一般研究」の採択について
2. 『研究紀要』原稿の査読結果について
3. 2014年度「一般研究」組織の変更について
4. その他

◇2015年2月12日(木) 13:00~ (博綜館 第3会議室)

1. 大谷大学文献研究叢書の創刊について
2. その他

◇2015年3月25日(水) 13:00~ (博綜館 第3会議室)

1. 2014年度「特定研究・指定研究」の研究成果について (報告)
2. 2015年度「特定研究・指定研究」研究組織・研究計画について
3. その他
  - (1)「真宗総合研究所研究紀要投稿ガイドライン」一部改正について
  - (2)大谷大学史資料室による調査報告について
  - (3)研究員総会について
  - (4)中国社会科学院歴史研究所との協定書の更新について

○「特定・指定研究」研究成果報告会

◇2015年3月6日(金) 15:00~

会 場：響流館3階マルチメディア演習室

1. 2014年度特定研究・指定研究 研究班の研究成果について

○2014年度第2回研究員総会

2015年3月6日(金) 17:00~ (Big Valley Cafe)

○海外出張

◇2015年1月24日(土)~1月28日(水)

出張先：中国社会科学院歴史研究所 (北京)

出張者：松川節 (研究所長)

用 務：学術交流協定の延長折衝と調印

教如上人研究

【研究会】

◇第4回研究会

日 時：2014年11月12日(水) 16:30~18:00

場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム

内 容：①浄泉寺調査報告

②日坂善重寺 (岐阜県揖斐川町) 寿像について

③堅田光徳寺 (滋賀県大津市) の教如関連史料について

◇第5回研究会

日 時：2015年1月14日(水) 16:30~18:00

場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム

内 容：①研究報告 廣瀬啓氏 (研究補助者)「教如と宗主絵像」

②浄泉寺追加調査報告

◇第6回研究会

日 時：2015年3月25日(水) 16:30~18:30

場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム

内 容：①研究報告 大桑齊氏「教如下付物はどう安置されたのか」

②調査報告 川端泰幸氏「光徳寺調査報告」

③春日谷五日講 (岐阜県揖斐川町) 調査予定の調整・検討

【調査】

◇2014年11月10日(月) 13:00~16:30

場 所：真宗大谷派浄泉寺 (京都市中京区)

内 容：教如寿像および由緒書などの調書作成・写真撮影

◇2014年12月19日(金) 13:00~17:00

場 所：真宗大谷派浄泉寺 (京都市中京区)

内 容：親鸞聖人御影ほかの調書作成・写真撮影

◇2015年2月19日(木) 13:00~17:30

場 所：真宗大谷派浄泉寺 (京都市中京区)

内 容：浄泉寺本尊阿弥陀如来立像 (鎌倉時代製作) の調書作成と写真撮影

◇2015年3月16日(月) 13:00~17:30

場 所：真宗大谷派光徳寺 (滋賀県大津市)

内 容：教如上人寿像ほか教如上人関連資料の調書作成・撮影



**清沢満之研究**

**【研究会】**

◇第1回研究会(西本研究員の発表)

日時: 2014年12月1日(月) 18:00~20:00

出席者: 加来雄之、藤原正寿、西本祐攝、名畑直日  
兒、村上良顕、石原樹、百武涼子

会場: 真宗総合研究所ミーティングルーム

- 目的:
- ・前研究班における大谷大学編『清沢満之全集』発刊の経緯と、資料の収集方法、『全集』に未掲載のもの、掲載が間に合わなかったものの確認
  - ・底本・依拠本としての法藏館版『清沢満之全集』の位置付けの再確認
  - ・『清沢満之全集』補遺を作成するにあたって、大谷大学編『清沢満之全集』で未掲載の資料の掲載方法、手続き等の方針
  - ・補遺作成にあたって、新たな調査場所の特定と調査方法の確認

**【学習会】**

◇第1回学習会

日時: 2015年3月31日(火) 13:30~14:00

出席者: 藤原正寿、西本祐攝、村上良顕、石原樹

会場: 真宗総合研究所ミーティングルーム

目的: 新年度の方針の確認

**【出張】**

日時: 2015年3月16日(月)~17日(火)

出席者: 藤原正寿、西本祐攝、村上良顕、石原樹

場所: 求道会館

目的: 近角常観宛の清沢満之の書簡の確認、調査親鸞仏教センター主催「第一回清沢満之研究交流会」への参加

**国際仏教研究**

**《英米班》**

**【会議】**

○近代教学アンソロジー出版記念シンポジウム(2015年6月26~27日)準備会合

会場: 真宗総合研究所ミーティングルーム

◇2014年11月18日(火) 16:20~17:50

◇2015年3月26日(木) 13:00~14:30

◇2015年4月7日(火) 17:00~19:00

○IASBS(第17回国際真宗学会大会 2015年8月)パネル発表等準備会合

◇2014年11月28日(金) 14:40~16:10

(於 EBSオフィス)

◇2015年3月26日(木) 14:40~16:10

(於 真宗総合研究所ミーティングルーム)

○IAHR(第21回国際宗教学宗教学会議世界大会 2015年8月)パネル発表等準備会合

◇2015年2月23日(月) 16:00~17:50

(於 真宗総合研究所ミーティングルーム)

◇2015年4月4日(土) 13:00~15:00

(於 真宗総合研究所ミーティングルーム)

**【公開講演会】**

①2014年11月14日(金) 16:20~17:50

会場: マルチメディア演習室(響流館3階)

講師: Prof. Jessica L. Main (University of British Columbia)

講題: Ōtani Sukauto and Honganji Sukauto:

The Religious Life of Semi-Autonomous and Sectarian Shin Buddhist Scouting Movements

大谷スカウトと本願寺スカウト:

半自治的、宗派的な浄土真宗スカウト運動

②2015年4月14日(火) 16:20~17:50

会場: マルチメディア演習室(響流館3階)

講師: 井内真帆 博士

(神戸市外国語大学 客員研究員)

講題: スーパーグローバル!? 日本人研究者のチベット研究 —これまでの研究で得られた経験と実感から—

Tibetan studies in a global context:

What is the advantage of Japanese scholars in Tibetan studies?

**【その他】**

上記の他、従来収集してきた仏教関係の洋書・学会誌のデータベース公開のために資料収集・整理を随時行っている。

**《東アジア班》**

○中国社会科学院歴史研究所の共同研究

◇2014年11月17日(月)~11月18日(火)

王啓発研究員・朱昌榮副研究員・雷聞研究員の3名を招聘し、本学にて研究活動を行い、公開研究会を開催した。

『牟子理惑論』中に見える老子

王啓発

程朱理学と清初の社会再建

朱昌榮

太清宮道士具善経と中唐長安道教 雷 聞

◇2015年1月24日(土)～1月28日(水)

松川節教授(真宗総合研究所長)、松浦典弘准教授(国際仏教研究研究員)が、中国社会科学院歴史研究所を訪問し、研究発表を行った。

新出の唐代尼僧墓誌について 松浦 典弘  
モンゴル仏典研究の現状と展望 松川 節

研究会開催に先立ち、松川真宗総合研究所長とト憲群中国社会科学院歴史研究所所長との間で交流協定の更新が行われた。

### ベトナム仏教研究

#### 【打合せ】

◇2014年11月25日(火)

宗教研究院トゥアン院長等来訪。研究打合せを行った。なお、27日(木)に織田顕祐(研究代表者)はトゥアン院長等を鉄眼一切経版木が保存されている黄檗山宝蔵院に案内した。

#### 【ベトナム調査出張】

◇2015年3月12日(水)～17日(火)

織田顕祐(研究代表者)・箕浦暁雄(研究員)は、大西和彦(研究員)とともに、北部ベトナムの寺院を調査し、宗教研究院の研究員諸氏と研究打合せを行った。おもな調査寺院は次の通り。

バクザン省ボーダー寺(普陀寺)、ハイズオン省アンニン寺(安寧寺)、ハイズオン省タイムマイ寺(青梅寺)、ドーソン(塗山)市の祥龍塔寺など。

また、タンロン大学とハノイ人文社会科学大学を視察した。

### 西藏文献研究(2015年4月1日～4月30日)

#### 【嘱託研究員招聘】

◇4月23日(水)～24日(金)

西沢史仁氏(西藏文献研究班嘱託研究員)

招聘理由:『サンブ寺統史』の校訂テキストと訳注出版のための打ち合せ

◇4月23日(水)～24日(金)

高本康子氏(西藏文献研究班嘱託研究員)

招聘理由:寺本婉雅研究に係る実物資料実見および打ち合せ

#### 【研究打合せ】

◇4月3日(金) 13:00～

◇4月9日(木) 12:20～

◇4月16日(水) 12:10～

会 場: 真宗総合研究所ミーティングルーム

議 題: 今年度の研究計画について

◇4月23日(水) 14:00～

会 場: 真宗総合研究所ミーティングルーム

議 題: 『サンブ寺統史』の研究/出版予定および寺本婉雅資料の研究について

### 大谷大学史資料室

#### 【研究会参加】

◇全国大学史資料協議会 西日本部会

2014年度 第4回研究会

日 時: 2014年12月16日(火) 13:30～16:45

場 所: 立命館大学 西園寺記念館

参加者: 松岡智美

◇全国大学史資料協議会 西日本部会

2015年度総会・第1回研究会

日 時: 2015年5月20日(水) 13:30～

場 所: 大阪工業大学(大宮キャンパス) OITホール

参加者: 松岡智美

#### 【ミーティング】

◇2014年11月26日(水) 10:45～12:00

出席者: 藤田義孝・戸次顕彰・松岡智美・渡邊温子

場 所: 真宗総合研究所

内 容: 業務報告と今後の活動について

◇2015年1月7日(水) 10:40～12:00

出席者: 藤田義孝・戸次顕彰・松岡智美・渡邊温子

場 所: 真宗総合研究所

内 容: 業務報告と今後の活動、ならびに展示作業の打ち合わせについて

◇2015年1月27日(水) 10:40～12:00

出席者: 藤田義孝・戸次顕彰・松岡智美

場 所: 真宗総合研究所

内 容: 展示作業の企画、業務報告

◇2015年2月4日(水) 13:00～14:00

出席者: 藤田義孝・戸次顕彰・松岡智美

場 所: 真宗総合研究所

内 容: 展示作業の企画、業務報告

◇2015年3月17日(水) 16:00～17:30

出席者: 藤田義孝・戸次顕彰・松岡智美・渡邊温子

場 所: 真宗総合研究所

内 容: 業務報告と2015年度に向けた活動課題の確認

(大谷大学史資料室スポット展示関係の作業)

◇2015年1月9日(金) 10:00～11:30

「東京から京都へ～大谷大学の歴史をたどる～」展の  
展示作業

参加者：松岡智美・渡邊温子

場 所：大谷大学図書館入口展示スペース

◇2015年2月13日(金) 10:00～12:00

「大谷大学キャンパス史～至誠館(旧図書館)・食堂  
編～」展の展示作業

参加者：戸次顕彰・松岡智美

場 所：大谷大学図書館入口展示スペース

上記活動以外にも、大谷大学史資料室では大学史資  
料の調査・整理や、閲覧・質問等への対応を日常業務  
として行った。

また、展示作業に際しては、大谷大学博物館からの  
協力を得た。ここに謝意を記す。

#### デジタル・アーカイブ資料室

3Dデジタルスキャナを利用した至誠館・3号館撮像

◇2014年12月13・14・21・23日

◇2015年1月11・24・25・31日

◇2015年2月1日

撮 像 委 託：(株)エス・ジー・エス

建物詳細撮影：バンファクトリー・デザインング

#### ■人事

研究所主事 (新) 松浦典弘 (旧) 藤田義孝

#### ■特別研究員

□新規採用(2015年4月1日付)

\*上田早記子

現 職：任期制助教

研究期間：2015年4月1日～2018年3月31日

研究課題：傷痍軍人職業保護事業で整形外科医が果  
たした役割についての歴史的研究

\*河崎 豊

現 職：本学非常勤講師

研究期間：2015年4月1日～2018年3月31日

研究課題：『タットヴァールタスートラ』シッドセー  
ナ注を中心とするジャイナ教の戒律解釈  
史研究

\*佐々木拓

現 職：任期制助教

研究期間：2015年4月1日～2016年3月31日

研究課題：依存に関する責任帰属を評価するための  
概念的基盤の構築

\*西沢史仁

現 職：指定研究「西藏文献研究」嘱託研究員

研究期間：2015年4月1日～2018年3月31日

研究課題：口承と文献学の融合に基づくチベット後  
期中観思想研究

\*古荘匡義

現 職：本学非常勤講師・学習支援アドバイザー

研究期間：2015年4月1日～2018年3月31日

研究課題：綱島梁川を中心とした明治・大正期の宗  
教思想研究のための基盤構築

□期間延長

清水洋平：2016年3月31日まで1年間の期間延長

□解任(2015年3月31日付)

鈴木達明(2015年3月31日付)

黒澤祐介(2014年9月30日付)

## 2010(平成22)年度「一般研究」研究成果概要 共同研究

# オリヤー文字 サンスクリット貝葉写本調査

山本 和彦

### 研究班

研究代表者：山本 和彦(准教授(当時)・仏教学)

研究員：兵藤 一夫(教授(当時)・仏教学)

協同研究員：ダシュ ショバラニ

(本学非常勤講師(当時)・特別研究員(当時))

本研究は、インド東部・オリッサ州に数多く残されている貝葉写本の伝承状況を確認するとともに、インドのみならず、ヨーロッパ、アメリカなど世界各地に現存する写本の現況調査を行い、オリヤー文字サンスクリット貝葉写本研究の基盤を整備することを目的として行った。

オリッサ州の貝葉写本については、ダシュ ショバラニ協同研究員が、それまでに自身で行ってきたいくつかの研究業績を踏まえて研究を行った。その成果は、ダシュ ショバラニ(著)「インド東部・オリッサにおける貝葉写本の研究動向」(『真宗総合研究所研究紀要』29号、2012年3月刊行)に掲載されている。

また、写本の現況調査としては、同じくダシュ ショバラニ協同研究員が2010年7月25日～同年9月25日までタイとスリランカにて調査を行った。アショーク王時代からインド東部・オリッサ州と東南アジアや南アジアの国々は宗教や貿易を通して結ばれていたことは周知のとおりであり、仏教やヒンドゥ教とともに様々な文献も伝えられた。今回の調査は、タイとスリランカの貝葉写本研究について情報を収集するだけでなく、両国に見られる貝葉写本製作技法やその伝統的な保存方法、宗教概念についても研究調査を行い、オリッサの貝葉文化との関係を明らかにすることを目的とした。そのために、長年オリッサの貝葉写本の研究を行っているダシュ ショバラニ協同研究員が調査を担当した。

タイにおける調査は、7月26日～8月8日まで、ワット・テプティダラム寺院及びバンコク郊外にあるいくつかの寺院に所蔵される貝葉写本の調査を行い、さらに9月7日～23日まで、チェンマイ大学社会調査研究所及びシルパコロン大学サンスクリット学センター、貝葉写本研究所にて研究を行った。

スリランカにおける調査は、8月14日～9月5日まで、コロombo市内の仏教文化センター、国立博物館、ケラニヤ大学などで行った。

以上の現地調査のうち、スリランカにおける調査成果については、ダシュ ショバラニ(著)「海外研究調査報告 スリランカにおける貝葉写本研究の現状」と題して、研究所報57号(2010年10月1日発行)に掲載されている。

ダシュ ショバラニ協同研究員による上記2点の研究業績により、オリヤー文字サンスクリット貝葉写本研

究の基盤は、一定程度整備された。同研究員によると、オリッサにおける貝葉写本に関する、今後の研究の方向性として次の諸点を挙げることができる：

- 1) 相応しい環境の中での貝葉写本の保管・保存が必要である。
- 2) 未整理のものが多く、まず簡易なものであっても、カタログをローマ字表記/英語で作成する。
- 3) その情報を、インターネットを利用して研究者に提供する。
- 4) 現在のところ一部のものに対してしかdescriptiveカタログが作成されていない写本の、より詳細な情報を公開するために、簡易カタログ作成後、速やかにdescriptiveカタログの作成に移行する必要がある。
- 5) オリッサの梵文写本は難読なkaranī書体で書かれている。これを読める人はオリッサにも非常に少ないため、そのローマ字転写つまりdiplomatic editionを作成する。
- 6) そして、研究者たちに簡単に提供することができ、効率よく研究を進めるために、貝葉写本一枚一枚をデジタル化する必要がある。そのためには大規模な予算が必要とされるので、写本の重要性和破損の度合いに基づき、撮影の優先順位を決めてデジタル化の作業を進める。

これらの貝葉写本は単なる文献ではなく、地域の人々の信仰の対象でもあるので、研究の過程で彼らの信仰心に傷を付けないような配慮が全般にわたって求められる。

一方、当初の研究計画に記したヨーロッパ、アメリカ地域に所蔵される貝葉写本の現況調査については、本年度内には実施することができなかった。今後の課題としたい。

※編集部より 本研究については、真宗総合研究所2010(平成22)年度「一般研究」の研究成果の概要として研究代表者の山本和彦准教授(当時)が執筆し、2011年10月1日発行の『研究所報』59号に掲載されました。その後、内容の一部に、当研究班の協同研究員であったダシュ ショバラニ氏(当時：本学非常勤講師・特別研究員、現：本学准教授)が学外の様々な研究プロジェクトで行った内容が盛り込まれ、また同氏の了解・校閲を経ていないことが判明したため、真宗総合研究所は、同氏及び学外関係機関への謝罪、「おわび」の掲載(『研究所報』61号)、「訂正とおわび」の掲載(『真宗総合研究所研究紀要』31号)を行ってきた経緯があります。このたび、『研究所報』59号掲載の研究成果概要を取り下げ、その訂正版を改めて掲載いたします。

## 研究所報 第66号

2015年7月1日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603-8143 京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435